和's YAMATO（わずやまと）

2022
秋号

北条氏　執権政治の確立

《神社仏閣から歴史を学ぶ》

■東叡山寛永寺　徳川歴代将軍家の菩提寺

●郷土史跡めぐり「今井神社古墳」

●シリーズ群馬の芸術家「須藤和之」

●お客様紹介「九十九里ホーム」様

●写真で楽しむ群馬の自然
「上毛野はにわの里公園 コスモス畑」

「枯梗とアキアカネ」F6号 須藤和之 画
ヤマトビオトープ園にて

写真で楽しむ 群馬の自然 ～季節の花～

住所：群馬県高崎市保渡田町1940-4

二子山古墳外周とその周辺に広がるコスモスの花畑で、約50万本が花を咲かせます。開花時期は9月下旬から11月上旬です。

上毛野はにわの里公園 コスモス畑

撮影 藤重 朋紀 氏

略歴 1952 群馬県利根郡みなかみ町生まれ
1971 群馬県立渋川高等学校卒業
1972 東京写真専門学院中退
1979 コマーシャルフォトスタジオ創美社入社
2001 フリー
2010 写真集「上州路・一本桜」
2011 写真集「上州路」

須藤 和之　Kazuyuki sutoh　プロフィール PROFILE

表紙の絵「桔梗とアキアカネ」

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業　2007年 東京藝術大学大学院 美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復日本画修了　2010年 同大学大学院　保存修復日本画博士課程修了 博士号取得　博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展(画廊翠巒)(同2011～20) 2011年 中央電機商会カレンダー原画(2011～21)　2013年　アーツ前橋開館記念展「カゼイロノハナ・未来への対話」出品、群馬銀行創立80周年記念 収蔵作品「群馬の四季」制作、慶應義塾大学非常勤講師(2013-2020)　2014年 個展(日本橋三越本店) (同2017,20)　2017年　群馬県展　県知事賞　2016年　個展(株式会社ヤマト)　2019年　高崎市タワー美術館トップランナーⅢ出品　2020年　上毛芸術奨励賞受賞　2022年 個展(株式会社ヤマト)　現在 日本美術院院友
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET　URL: http://sutooo.net/

和's YAMATO（わずやまと） 秋 号 2022（第54号）

【和's yamato】の由来
ヤマトの漢字の「和」、Water&Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。
和's YAMATO 秋号 2022年(令和4年) 8月発行
発行：株式会社ヤマト(広報室)群馬県前橋市古市町118　tel:027-290-1891 fax:027-290-1896

建設プロダクト ヤマト

株式会社ヤマト 群馬県前橋市古市町118 〒371-0844　TEL.027-290-1800(代)　FAX.027-290-1896
支店/東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北　営業所/軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、新潟、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、滋賀、青森
附属施設/大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
ヤマトホームページ　https://www.yamato-se.co.jp/

北条氏執権政治の確立

監修：歴史家・文学博士 安藤優一郎氏
文：木下直也

北条時政は子の義時に追放され、義時は政所別当（政務の最高責任者）に就任し、二代目執権の座につき、鎌倉幕府の実権を握る。義時の権力基盤を崩そうとする和田家が乱を起こし、三代将軍・源実朝の暗殺、承久の乱と幕府は危機にさらされるが、義時は政敵を倒し、幕府の政務と軍事を掌握する。

鶴岡八幡宮
神奈川県鎌倉市雪ノ下2ー1ー31

和田義盛の滅亡

和田氏は三浦氏の家系で、三浦義村は和田義盛の従弟にあたる。義盛は頼朝が兵を挙げた時からの忠臣で、初代侍所別当（軍事部門の長）を務め北条氏とは協調関係にあったが、鎌倉幕府三代将軍の源実朝は義時と親密で、御家人の中には義時に反感を持つ者もあり、義盛や義村も次第に義時を快く思わなくなっていた。二人は義時の権力基盤を崩そうと密かに企んでいた。

建暦三年（一二一三）二月、源実朝の廃位と義時を排除する陰謀が発覚した。首謀者は信濃源氏の泉親衡（いずみちかひら）で、企てには和田義盛の子の義直、義重と甥の胤長が加担していたため、義時に捕らえられた。義盛の嘆願により義直、義重は赦免されたが、胤長は陰謀の張本人であるとして義時は許さず、胤長を流罪とした。これは、義時が義盛を挑発するために赦免しなかったとする説がある。胤長を流罪にされて面目を潰された義盛は、義時打倒のため挙兵の準備をし、従弟の三浦義村からは自分に味方する誓約書をとった。しかし、義村は義盛を裏切り、義盛の謀反を義時に密告する。建暦三年五月、義盛は義時の館に奇襲を仕掛けるが、義時は襲撃計画を事前に察知していたため義盛を迎え討ち、義盛は討死し、和田一族は滅亡する。

三浦義村と和田義盛は同じ三浦一族で、三浦の本家は義村、義盛は分家だった。しかし、鎌倉幕府内では、分家の義盛が要職を務めていたため、義村は義盛に反感を持っており、義盛を裏切ったとする説がある。義村は義時に恩を売り、幕府内での権力争いを優位に進めようとしたのかもしれない。

義時は政権掌握

北条義時は和田義盛を討ち、義盛が担っていた侍所別当の役職を得て、政治と軍事の実権を掌握し、北条氏の実力を知らしめた。北条氏が実権を強化する一方、鎌倉幕府三代将軍の源実朝は、後鳥羽上皇や朝廷との結びつきを強めていった。実朝は自分の後継となる将軍を、朝廷から輩出させたかった。鎌倉は御家人同士の争いが絶えないため、天皇の皇子が将軍ならば御家人から異論は出ないと考えたのだ。元久元年（一二〇四）十二月、実朝は後鳥羽上皇の寵臣・坊門信清の娘で、後鳥羽上皇の従妹に当たる信子を正室に迎え、朝廷との結びつきを強化する。北条氏としては、執権としての権力基盤を強化するため、将軍はお飾りであることが好ましく、幕政に関与しない天皇家の皇子が将軍職に就くことは好都合であった。

源実朝の暗殺

建保六年（一二一六）、実朝は朝廷から権大納言→左近衛大将→内大臣→右大臣と官位を立て続けに授かり、異例の昇進をしていく。これは、鎌倉幕府将軍の権威を高め、皇族から将軍を迎え入れる布石と見ることができる。一方、二十代半ばにして高位の官職を得ることは、官位の重みに耐えかねて実朝の寿命が縮んでしまう、と危惧する見方もあった。朝廷は、実朝を亡き者にするため、高位の官職をあえて与える「官討ち」を仕組んだのではないか、とする説もある。

北条氏と実朝は利害が一致し、次期将軍を皇族から迎える準備を進めていたところ、承久元年（一二一九）一月二十七日、実朝が鶴岡八幡宮での右大臣拝賀の儀式の最中に、頼家の遺児・公暁（くぎょう）に殺害されるという大事件が起こった。公暁は、父・頼家の後継で将軍に就く可能性が高かったにもかかわらず、頼家は暗殺され、実朝が将軍に就いたため実朝を妬み、殺害して自分が将軍になろうと企てたのだ。

公暁に実朝暗殺をそそのかしたのは、三浦義村であったとする説がある。義村は、公暁に実朝とともに儀式に参列している義時も殺害するように指示していたともいわれ、その後は自らが幕府の実権を握ろうとしたのかもしれない。しかし、義時は直前に参列を取りやめたため、義時を討ち取ることが出来なかった。義村は公暁を謀反人として捕らえ、成敗する。義村は公暁の口封じのため、自ら殺害したのではないか、とする説がある。

幕府と朝廷の対立

実朝が死去したことにより、北条政子は後鳥羽上皇に使者を派遣し、皇子の鎌倉下向を求めた。しかし、上皇は皇子を将軍候補として鎌倉に差し向けることに難色を示し、政子の要求を拒否する。これは実朝殺害の影響で、戦乱や暗殺がたびたび起こる鎌倉は物騒で、皇子の安全が保たれないことと、実朝がいなければ朝廷が幕府を制御することは難しいと考えたのかもしれない。

また、後鳥羽上皇の寵愛する亀菊が所有している摂津国の土地の管理をめぐって、上皇と義時が対立する。

その土地を管理する地頭は義時であった。亀菊が義時の振る舞いが気に入らないと上皇に告げ口し、上皇が義時の地頭解任を要求したのだが、これは上皇の義時への嫌がらせだった。北条氏は地頭解任を拒否し、改めて皇子の鎌倉下向を求めるが、上皇は再び拒否し、両者の亀裂は深まるばかりだった。

将軍が不在では幕政に支障が出るため、北条氏は皇子の下向を諦め、将軍には九条兼実の孫・道家と頼朝異母

和田塚
和田一族の墓と伝わる。（神奈川県鎌倉市由比ヶ浜江ノ電和田塚駅至近）

近殿神社（ちかたじんじゃ）
三浦義村公を祀る。義村公の木像を安置している。神奈川県横須賀市大矢部1ー9ー3

妹の孫の間に生まれた三寅（頼経）を四代目鎌倉殿に就かせた。北条氏は、皇族将軍を迎えることは出来なかったが、頼朝と遠縁で貴族の筆頭となる家柄の摂関家から将軍を迎え（摂家将軍）、鎌倉殿の不在を回避した。

承久の変勃発

承久三年（一二二一）五月、後鳥羽上皇は義時追討の院宣を五畿七道に下し、三浦・足利・小山・武田・宇都宮など東国の御家人にも院宣が届いた。北条政子は、上皇から「義時を討て」と命令が下されれば、反北条の御家人はその命令に従うことを危惧した。そこで政子は、義時追討の院宣を、幕府追討の院宣と意味をすり替え、御家人の結集を図った。

政子は、「頼朝公の恩は山より高く、海より深い」と御家人の感情に訴える演説をした。東国の武士にとって重要なのは、所領を保証してくれるかどうかという点であり、これまでそれを保証してくれたのは源氏将軍家で、現在では執権北条家であった。御家人たちは、後鳥羽上皇は鎌倉幕府を否定したととらえ、朝廷に抗戦する決断をした。

承久の変で幕府軍は朝廷軍を破り、後鳥羽上皇は降伏し出家の後、隠岐の島に配流となる。以後、鎌倉幕府は約百五十年間存続した。

地域の話題：群馬県高崎市

「いざ、鎌倉」御恩と奉公忘れぬ東国武士

佐野源左衛門常世の美談

鎌倉幕府第五代執権・北条時頼（一二三七～一二六三・義時の曾孫）は、康元元年（一二五六）に執権を辞して出家し、貧しい僧に扮して諸国を廻ったという伝説があります。常世神社（群馬県高崎市上佐野町）は、佐野源左衛門常世（生没年不詳の武士）の屋敷跡と伝わり、当地には謡曲「鉢の木」にもなった次のような逸話が伝わっています。

「大雪のある夜、上野国佐野荘のあばら家に、一人の旅僧が宿を求めてきた。主人は室内に招き入れ、僧に暖を取るように勧めるが、いろりの薪が足りず、秘蔵の鉢植の梅、松、桜をくべてもてなした。僧が素性を尋ねると、元は佐野荘の領主・佐野源左衛門常世と名乗り、『一族に土地を奪われ、今はこのように落ちぶれているが、いざ鎌倉の命令が下れば一番に馳せ参じ忠勤に励む所存だ』と語った。それからしばらく後、鎌倉から諸国の武士に動員令が下り、常世も破れた具足と錆びた長刀、やせ馬にまたがり鎌倉に馳せ参じた。すると役人から呼び出され、貧相な恰好を叱責されるのかと恐々顔を上げると、そこにはあの大雪の夜の旅僧の顔があった。その旅僧こそ、五代執権北条時頼だった。時頼は一宿一飯の礼を述べ、鎌倉に馳せ参じたことをほめたたえ、佐野荘の安堵を約束した。その上、常世が時頼のために薪として使った鉢の木にちなんで、上野国松井田荘、越中国桜井荘、加賀国梅田荘を常世に与えたという。」

常世神社は地域の方々に守られ、「鉢の木」の説話を後世に伝えています。

常世神社の祠（群馬県高崎市上佐野町495－2）

常世神社の参道

常世が秘蔵の鉢の木を切る様子（常世神社境内）

鎌倉幕府関係年表

年		北条義時	事項
元久2年（1205）	7月20日	43歳	義時が2代目執権に
	8月		京都で平賀が誅殺される
建暦3年（1213）	2月	51歳	実朝の廃位と義時排除の陰謀発覚～侍所別当和田義盛一族も関与
	5月2日		義盛が三浦一族を率いて御所や義時・大江広元邸襲撃
	5月3日		義盛討死
	5月5日		義時が侍所別当兼任
建保6年（1218）	2月	56歳	北条政子上洛
承久元年（1219）	1月27日	57歳	後鳥羽院の皇子を次期将軍として迎える交渉を開始
			鶴岡八幡宮で実朝が甥の公暁に殺害される
	3月8日		後鳥羽院の使者が鎌倉に下向
			摂津国長江荘と倉橋荘の地頭職の解任を要求
	3月15日		京都に向かった北条時房、解任を拒絶
	7月19日		九条道家の子・三寅が次期将軍として鎌倉に下向
承久3年（1221）	4月20日	59歳	順徳天皇譲位、仲恭天皇即位
	4月28日		後鳥羽院、流鏑馬と称して畿内近国の武士を招集
	5月14日		義時追討の院宣が五畿七道に下る
	5月15日		後鳥羽院、京都守護伊賀光季を討つ
	5月19日		幕府、遠江・信濃以東の国々に上洛を促す
	5月21日		幕府、即時上洛確認
	6月5日		幕府軍、上皇軍を尾張で破る
	6月14日		幕府軍、上皇軍を宇治で破る
	6月16日		泰時率いる幕府軍入京
元仁元年（1224）	6月12日	62才	義時死去
	7月17日		政子が三浦義村邸を訪れて詰問
	閏7月23日		一条実雅を京都に送還
	閏7月29日		政所執事伊賀光宗、執事罷免
	8月29日		義時後妻伊賀の方は伊豆に蟄居
嘉禄元年（1225）	7月		政子死去。この年、評定衆を新設
嘉禄2年（1226）	正月		三寅改め九条（藤原）頼経に将軍宣下

「鎌倉殿の13人」主な登場人物【二〇二三年 NHK大河ドラマ】

鎌倉殿の13人
- 北条義時：小栗旬
- 北条時政：坂東彌十郎
- 比企能員：佐藤二朗
- 和田義盛：横田栄司
- 三善康信：小林隆
- 足立遠元：大野泰広
- 八田知家：市原隼人
- 二階堂行政：野仲イサオ

北条家
- 牧の方：宮沢りえ
- 北条政子：小池栄子
- 実衣・阿波局：宮澤エマ
- 北条泰時：坂口健太郎
- 北条時房：瀬戸康史
- 比奈：堀田真由
- 初：福地桃子
- 平賀朝雅：山中崇
- つつじ：北香那

源氏
- 源頼家：金子大地
- 阿野全成：新納慎也
- 源範頼：迫田孝也
- 源実朝：柿澤勇人

坂東武士
- 畠山重忠：中川大志
- 三浦義村：山本耕史

朝廷・公家
- 後鳥羽上皇：尾上松也
- 九条兼実：田中直樹
- 土御門通親：関 智一

その他
- 公暁：寛一郎
- トウ：山本千尋
- のえ：菊地凛子
- 慈円：山寺宏一
- 藤原兼子：シルビア・グラブ
- せつ：山谷花純

神社仏閣から歴史を学ぶ

東叡山 寛永寺

徳川歴代将軍家の菩提寺

東叡山 輪王寺門跡 門主・寛永寺貫首 浦井正明師

東叡山寛永寺は、寛永二年（一六二五）に慈眼大師・天海大僧正により幕府の祈禱寺として発足し、朝廷の祈願所を兼ね、やがて徳川歴代将軍の菩提を弔う所となりました。また、「上野の宮様」と呼ばれた一品法親王（いっぽんほうしんのう）の存在は、将軍と並んで江戸の人々の誇りでもありました。東叡山 輪王寺門跡 門主・寛永寺貫首の浦井正明師に、寛永寺の成り立ちと歩みについてご寄稿いただきました。

寛永寺の成り立ちと歩み（後編）

徳川家の菩提寺

創建当時の寛永寺が徳川家の菩提寺ではなく祈禱寺であったことは前号の本紙で既に述べた。そして、この寛永寺の建立と共に天正十八年（一五九〇）の家康の入府以来の徳川家の祈禱寺であった金龍山浅草寺は、その地位を失い、やがては寛永寺の傘下に組み込まれていくことになる。

一方、天正以来、江戸における徳川家の菩提寺は増上寺に決まっていた。徳川家はすでに松平姓（三河国岡崎の在、松平郷に居住）時代から浄土宗の檀家であり、この縁から江戸に於ける菩提寺も同じ浄土宗の増上寺（家康の入府時は竜ノ口（クチ）にあった）に一早く決まっていたのである。

ところが、三代将軍の家光が死ぬ時になって、風向きが少々変わってきた。家光はその死に当たって、老中の酒井忠勝に、自分が死んだら増上寺ではなく寛永寺に葬儀を任せること、そして、初七日には上野を発って日光へ遺骸を移し、そこに霊廟を営むようにと指示した。

当時すでに、「東照大権現」という比類のない偉大な神として崇められていた家康自身が直々に定めていった菩提寺の増上寺をさしおいて、家光は本来祈禱寺であるはずの寛永寺に於ける葬儀を指示したのである。まことに不思議なことといわなければならない。だが、それにはそれなりの理由があったのである。

家光には二歳年下の弟がいた。幼名国千代、後の駿河大納言忠長である。父はもちろん秀忠だが、忠長の母も家光の母と同じ秀忠の正室・お江与の方であった。歴代将軍の兄弟関係を見ると、生母を同じくする兄弟は極めて少ない。その意味では家光と忠長はもっと仲が良くていい訳である。しかし、現実はまったくの反対であった。この二人は極めて仲が悪かったのである。そして、その理由は一にかかって、秀忠夫妻、特に母・お江与の方の、忠長偏愛にあった。要するに、秀忠夫妻は家光を廃嫡して忠長を三代将軍の座に着けたかったのである。もちろん、この動きは現実には阻止され、家光は無事に三代将軍の座につき、一方の忠長は父・秀忠の死後に切腹を命じられることになる。

この話は講談にもなっている位だから、ご存知の方も多いだろう。従って、ここではこれ以上詳しく述べることは控えておこう。今大切なことは、この話がいわゆる巷説ではなく、程度の差こそあれ、現実にあったことだという点である。現在、日光山輪王寺に所蔵されている「東照大権現祝詞」と題する春日局自筆の巻物の中には、この事実がはっきりと書かれている。如何に春日局が家光の乳母という立場だったからといって、今はすでに神になった家康の神前で嘘の祝詞を奏上する筈がない。これは当時の思想環境をみればすぐに納得がいくことだろう。

そんな訳だから、世に言う家光の秀忠嫌いもそれなりにわかるのである。そして、家光が父の代わりに敬慕したのは祖父家康であった。しかし、家康は家光が十三歳の時にすでに死んでいる。現実に相談に乗ってくれる人がほしい。そして、それが寛永寺の開山、天海僧正だったのである。

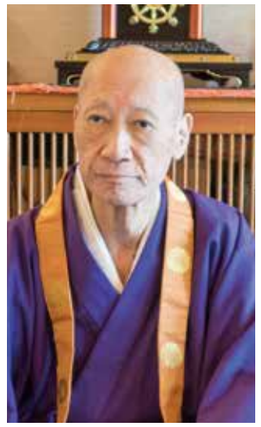
家光にとって、この二人の存在は別格だった。今ここで詳しく述べる余裕はないが、一つだけ例をあげておく

上野大仏

寛永8年（1631）に初建された上野の大仏様は度々罹災しましたが、その都度復興されています。しかし関東大震災によりお首が落ち、第二次大戦時には軍の供出令（きょうしゅつれい）により胴体を徴用されて、お顔のみが残されました。大仏殿の跡地にはパゴダ（仏塔）が建立され、本尊として旧薬師堂本尊の薬師三尊像が祀られています。

清水観音堂

清水観音堂は、寛永8（1631）年に天海大僧正によって建立されました。天海大僧正は江戸城の鬼門の守りを意図し、比叡山や京都の有名寺院になぞらえた堂舎を次々と建立しました。清水観音堂は京都の清水寺を見立てたお堂で、清水寺と同じ舞台作りで、初めは上野公園内の「擂鉢（すりばち）山」に建てられました。しかし元禄初期、今の噴水広場の地に、寛永寺総本堂の根本中堂建設が決まると、その工事に伴って元禄7（1694）年9月に現在地に移築されました。上野の山に現存する、創建年時の明確な最古の建造物です。平成2年（1990）12月から文化財保存修理が行われ、平成8年（1996）10月に竣工、元禄移築時の面影を再現しました。国指定重要文化財です。



東叡山 輪王寺門跡 門主・寛永寺貫首
浦井 正明（うらい しょうみょう）**師**

昭和12年（1937）東京生まれ。昭和36年（1961）慶應義塾大学文学部史学科卒業。東叡山現龍院前住職。寛永寺執事長、台東区教育委員会委員長、台東区文化財保護審議会委員等を歴任。

と、家康については秀忠の建てた東照社を全面的に撤去し、いわゆる寛永の大造替工事を行ったことがあげられる。また、天海僧正については、その死後に自ら七日間の精進潔斎をし、なおかつ将軍の例に準じて、江戸、京都、大坂、長崎の四大都市で軽犯罪者の釈放を行ったことなどがあげられるだろう。なんといっても、家光のこの二人に対する敬仰の念はまさに常軌を逸したものであり、右のような例は挙げていけば際限がない。

要するに、今は芝に眠る父・秀忠の所へ行くよりは、自分が敬慕していた家康と天海僧正の二人が眠る日光山に自分の霊廟を営みたいというのが家光の望みだったのである。しかも、天海僧正の時代以来、日光山は東叡山と一体の寺であった。日光山の住職は天海僧正以来、幕末の公現法新王(北白川宮能久親王)に至るまで、すべて東叡山の山主である輪王寺宮が兼帯していたのである。そういうこともあって、家光は寛永寺で葬儀をし、日光山に霊廟を営むことにしたのである。

さて、話がこれで済めば、家光だけが例外という事で問題は無かった筈である。というのは、当時の人々は増上寺の関係者も含めて、家光の家康と天海僧正への異常な執心ぶりを知っていたから、家光の我儘も見て見ぬふりをしていたのである。

しかし、その家光の子である家綱(四代将軍)・綱吉(五代将軍)の二人が相次いで寛永寺を選び、上野で葬儀をした上に霊廟までも上野に設けたとなると、事態はまったく変わってくる。

このケースを黙って看過したとあっては、増上寺の面目が立たない。この二人の場合には、芝は幕府に対して猛烈な抗議行動を起こしている。もちろん、現実には幕府はあくまでも両将軍の御遺命ということで押し通してしまうのだが、綱吉のことが一段落したところで、家宣(六代将軍)と幕閣は芝の言い分を踏まえて調整工作を行い、以後は芝と上野の双方の面子が立つように計らうことでこの問題を収拾している。

かくして、寛永寺は家光から家綱にかけて、祈禱寺であると共に徳川家の菩提寺をも兼ねるようになったのである。こうして、寛永期以来の江戸の二大寺、芝と上野のバランスは大きく失われ、比重が大きく上野側に傾くことになった。

一方、家宣らの調整工作の結果、幕末までの歴代将軍は、ちょうど六人ずつ芝と上野に分かれて葬られていくことになる。ただ、その場合、家康と家光は寛永寺と同体とはいえ、遥か遠隔の地、日光山であり、最後の将軍・慶喜も上野とはいえ、明治を通り越した大正二年(一九一三)に亡くなった人である。従って、この三人は例外と考えた方がよいだろう。

今、ここで歴代将軍の一人一人について事情を説明する余裕は無いが、残る十二人の将軍のうち、上野に家綱、綱吉、吉宗、家治、家斉、家定の六人が、そして芝に秀忠、家宣、家継、家重、家慶、家茂の六人がそれぞれ均等に分かれて葬られたのは決して偶然のことではなかったのである。

輪王寺宮

関東天台の牙城を上野に築き始めた時の天海僧正は既に九十歳になっていた。僧正はその後十八年を生き抜いて、寛永二十年(一六四三)に百八歳で入寂したのだが、この段階では、僧正のもう一つの宿願であった皇子(法親王)を東叡山の山主に迎えて宗教界を統轄しようとの計画はまだ実現していなかった。

しかし、この僧正の死が引き金となって、死の翌年の正保元年(一六四四)の十月、ついに後水尾天皇の第三皇子である幸教親王(時に十一歳)が京都粟田口の青蓮院で得度(出家)した。次いで名を尊敬(後に再び守澄と改める)と改めた親王は、正保四年の九月に、いよいよ東叡山へ下向し、承応三年(一六五四)には正式に第三世の東叡山主兼日光山主の座についた。更に守澄法親王は明暦元年(一六五五)の十月には天台座主の座につき、翌二年十一月二十六日にはいわゆる「輪王寺宮」の称号の勅賜を受けたのである。

こうして、天海大僧正から毘沙門堂門跡公海へと継承されてきた東叡山主の座は、これ以降幕末の十五世、公現法親王に至るまで、歴代皇子か天皇の猶子(養子)によって受け継がれることになった。これが世に言う「輪王寺宮一品法親王」である。法親王は他に上野宮、日光宮、輪門様、日門様などとも呼ばれ、江戸の市民はこの宮と将軍の二人が並び住む江戸の町に生まれ、生活することを何より誇りとするようになるのである。

ところで、守澄法親王の例のように、歴代の宮は、原則として天台座主の座につくと共に、東叡山主の他に、日光山、比叡山の両山の山主をも兼帯したので、世にこれを「三山管領宮と呼び、天台一宗はもとより、広く日本仏教界に君臨する象徴的な存在となった。

現在、そのことを何よりもよく示しているのは「輪王寺」という門室号の勅賜だろう。「輪王」とは、もともと古代インドの理想の君主「転輪聖王」に由来する名前である。釈迦が仏法を説くことを「転法輪」というが、輪とは本来戦車の車輪の意味である。従って、転法輪とは、ちょうど優れた大王が戦車に乗ってすみやかに四方を平定するように、釈迦の教えがすみやかに転じ拡がっていくことを意味している。こうしたことから、後に釈迦自身を表すのに輪宝を用いた訳である。従って、仏教界全体を統轄する理想の僧の名としては、「輪王」の名が最も相応しいことになる。

こういう訳だから、宮の格式は極めて高く、通常は尾張、紀伊、水戸のいわゆる徳川御三家並みの待遇を受け、特に事が法要儀式に関わる時はこの御三家を凌ぐ格式をもって遇されたのである。たとえば、宮は将軍以外には使えない溜塗りの網代の駕籠を用いていし、これも将軍以外は下乗の江戸城本丸の表玄関にまで直接駕籠のまま横付けできる特権を持っていた。

従って、将軍でさえも、正月を初め、折にふれて使者を立てて宮の労をねぎらうと共に、数々の進物を贈るのが通例であった。将軍がそんな具合だから、諸大名などは、上野の将軍霊廟へ参詣した折には、到着時と帰途には必ず本坊に立ち寄って、宮への挨拶を済ませてから帰邸しなければならなかった。こうしたことは、もちろん宗教界に於いても同様で、例えば、京都の東西本願寺の門主なども、江戸下向の折には、上野宮のご機嫌伺いに参上していたのである。

(了)

清水観音堂の月の松

清水観音堂は、江戸時代から庶民に親しまれる名所となりました。特に境内に配された月の松は、江戸時代の浮世絵師歌川広重の「名所江戸百景」において「上野清水堂不忍ノ池」そして「上野山内月のまつ」として描かれています。月の松は、明治初期の台風により被害を受けて永らく失われていましたが、平成24年(2012)12月に復元されました。清水堂の舞台から見下ろした月の松には近江の竹生島の宝厳寺に見立てて建立された不忍池辯天堂と参拝の賑わいを望む事ができます。月の松は、江戸時代の植木職人の技の粋を凝らして作り上げた造形と見られていますが、新たに復元された月の松も、現代の造園技術を駆使して造形されました。

不忍池辯天堂

不忍池辯天堂(しのばずのいけべんてんどう)は、江戸初期の寛永年間に、天海大僧正によって建立されました。天海大僧正は天然の池であった不忍池を琵琶湖に見立て、また元々あった聖天(しょうてん)が祀られた小さな島の側に水谷伊勢守(みずのやいせのかみ)勝隆(かつたか)公と相談して大きな島を作り、そこに竹生島の「宝厳寺(ほうごんじ)」に見立てたお堂を建立したのです。琵琶湖と竹生島に見立てられたため、当初はお堂に参詣するにも船を使用していたのですが、参詣者が増えるにともない寛文年間に橋がかけられました。昭和20年(1945)の空襲で一帯は焼けてしまいましたが、お堂は昭和33年(1958)に復興し、また昭和41年(1966)には芸術院会員であった児玉希望(こだまきぼう)画伯による龍の天井絵が奉納されました。

郷土史跡めぐり

群馬県前橋市今井町

今井神社古墳

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 主任調査研究員 本田 寛之

今井神社古墳のある前橋市今井町は、前橋市内を南北に連なる国道17号バイパス（上武国道）と東西に連なる国道50号が交わる交通の要所です。その国道50号から200mほど南下した荒砥川沿いの左岸に立地しているのが今井神社古墳です。

今井神社古墳のある前橋市荒砥地区は、赤城山の南麓に位置し、標高は、約85mで荒砥川や桃ノ木川など複数の河川が南北に流れています。また、現在の広瀬川流域は、かつて利根川が流れていた場所であり、当時の人々の生活にとって必要な水を確保するのに適した土地であったといえます。

今井神社古墳は、全長71m、前方部幅50m、後円部径44mの前方後円墳で、墳丘の高さは7.5m、前方部幅が後円部の径よりも大きく、前方部が左右に張り出した形が特徴となっています。墳丘には葺石があり、埴輪が並べられていたと考えられます。昭和36年（1961年）に墳丘の測量調査が、昭和55年（1980年）に古墳の範囲確認調査がおこなわれました。古墳の範囲確認調査の結果、周囲には馬蹄形の周堀が巡らされていたことがわかりました。周堀も含めると全長は、約90mにもなります。墳丘の発掘調査はおこなわれていないため、内部の状況については、不明な点が多いのですが、今井神社の社殿を建設する際に、石棺の一部や埴輪が出土しています。石棺は、凝灰岩製で縄掛け突起が残っていました。現在今井神社境内に保存されており、見学することができます。

古墳の築造時期は、埴輪や石棺の形式から5世紀後半と考えられています。古墳は、昭和10年（1935年）に県内全域で行われた古墳の悉皆調査をまとめ刊行された『上毛古墳総覧』によると、「荒砥村301号墳」として登録されており、昭和56年（1981年）には、前橋市の指定史跡となっています。

現在、古墳の後円部には今井神社の社殿が建立されており、前方部には、観世音菩薩を祀った北向観音堂が建立されています。

『上毛古墳総覧』には、今井神社古墳を中心として27基の古墳からなる今井神社古墳群が形成されていたことが記載されています。このうち3基の古墳について、昭和56年に群馬県埋蔵文化財調査事業団により、発掘調査がおこなわれました。3基の古墳は、いずれも残存状況は良好ではありませんでした。1号墳は墳丘と頂部が削られており、3号墳は、わずかな高まりが確認された程度で、外観が想定可能な古墳は2号墳だけでした。

2号墳からは、靫（ゆぎ）を背負った人物埴輪や円筒埴輪、耳環などの遺物が出土しました。現在、靫を背負った人物埴輪については、群馬県埋蔵文化財調査センター発掘情報館の収蔵展示室にて示されています。この埴輪の特徴は、前腹部に装着した刀子に右手をそえ、左肩に弓、背中に靫を背負い直立する姿勢をしており、頭には頭巾をかぶり鉢巻をしています。

2号墳は、その特色や出土遺物などから6世紀末頃の築造と推定されています。

また、調査された3基の古墳のうち、2号墳及び3号墳の下部からは、竪穴建物の一部と見られる遺構が確認されており、土器が数点出土しました。

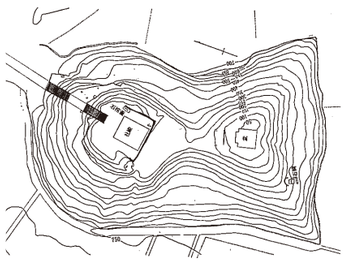
この竪穴建物は、古墳が築造された6世紀末以前の建物と考えられるので、古墳が造られる前には人々の暮らしがあったものと思われます。

現在、この地域は、今井神社古墳を残すだけですが、今井神社古墳を訪れ、往時の人々の営みを想像してみてはいかがでしょうか。

荒砥川方向より今井神社古墳を臨む（写真提供：前橋市教育委員会）

今井神社古墳位置図（国土地理院地形図「前橋」より）

今井神社境内より後円部に建立された社殿を臨む



今井神社古墳実測図（出典：「前橋市史」第一巻より）

今井神社古墳全景
（写真提供：前橋市教育委員会）下が西方向

この竪穴建物は、古墳が築造された6世紀末以前の建物と考えられるので、古墳が造られる前には人々の暮らしがあったものと思われます。現在、この地域は、今井神社古墳を残すだけですが、今井神社古墳を訪れ、往時の人々の営みを想像してみてはいかがでしょうか。

靫を背負った男子の埴輪
（群馬県埋蔵文化財調査センター発掘情報館にて展示）

この埴輪の特徴は、前腹部に装着した刀子に右手をそえ、左肩に弓、背中に靫を背負い直立する姿勢をしており、頭には頭巾をかぶり鉢巻をしています。2号墳は、その特色や出土遺物などからから6世紀末頃の築造と推定されています。また、調査された3基の古墳のうち、2号墳及び3号墳の下部からは、竪穴建物跡の一部と見られる遺構が確認されており、土器が数点出土しました。

今井神社古墳前方部に建立されている北向観音堂

今井神社境内に安置されている組み合わせ式石棺の石材
（写真提供：前橋市教育委員会）

シリーズ 群馬の芸術家 18

須藤和之 2

ビオトープの草花を描き続けて

美術研究家 染谷 滋

ヤマトギャラリーで二度目の個展

以前本シリーズでも紹介したことのある(二〇二〇年夏号)日本画家の須藤和之が、本社一階のギャラリーで九月十八日まで展覧会を開催している。「絆 l i e n」と題された本展は、本誌の表紙原画を中心に(有)中央電機商会カレンダー原画なども加えて展示されているが、本稿では表紙原画を紹介することで、前回はあまり話せなかった須藤和之の画風について述べたいと思う。

ヤマトギャラリーでの個展は今回が二度目となるが、一回目は二〇一六年秋の「四季のうつろい」と題されたもので、これがきっかけとなって本誌の表紙原画を描き続けることになった。すなわち二〇一七年春号(第三二号)の《前橋・春の風》が第一作目である。途中一度だけ休んで本号の表紙が二二作目に当たっている。

モチーフはビオトープの植物

表紙原画のモチーフはヤマトビオトープ園の草花である。ヤマトビオトープ園は二〇〇一年三月に完成し、自然の生態系が身近に観察できる場所だ。六六〇㎡の園内でこれまでに記録された生きものの数は、昆虫と水生生物二六種、淡水魚二種、野鳥二七種、山野草二三七種、樹木二八種とパンフレットに記載されている。

一作目の《前橋・春の風》は赤城山を背景にしてハルジオンが風にそよいでいる。ハルジオンはキク科の多年草で、道端などでよく見かける植物だ。よく似ていて間違いやすいのがヒメジョオンで、花弁の幅が細くて数が多いのがハルジオンだそうだ。つまり絵に描くにはハルジオンの花びらは大変だということで、本作の花のひとつひとつにも注意を払っていただきたい。

一匹の赤いテントウムシが中央の花の茎で休んでいるのに気付かれると思う。テントウムシは須藤作品には頻繁に登場する。赤城山も(株)ヤマトから見える姿を描いているが、実際にビオトープの背景に見えるわけではないのは勿論だ。この構図にこそ作者の工夫と力量が表れている。

連作ならではの面白さ

二作目の《前橋・夏の風》は榛名山を背景としたタチアオイで、一作目とは対になる作品だ。青い空も夏を感じさせる色合いで、雲も入道雲のように力強い塊となっている。ピンクの花が青空に溶け込まないように雲が配置され、花数の多いタチアオイも蕾の状態で煩雑になるのを避けている。本来タチアオイの花は梅雨頃に茎の下から開花し、夏には茎の上まで咲きそろうので、この絵のように茎の途中の花だけが咲くことはないと思うのだが、そこは絵ならではの創意工夫である。一作目と二作目を比較してみることで、背景の空や雲などの何気ないものにも作者の苦心が読み取れるだろう。

三作目の《讃》は秋の黄金色に染まった園の中にススキの穂が白く浮き上がった作品。飛んでいるのはアキアカネだろうか。白い羽根がススキの穂と呼応して画面を引き締めている。

四作目の《雪景色と福寿草》は冬。降り積もった雪と、その雪を融かしながら花を咲かせた福寿草に春の息吹を感じさせる作品。これで春夏秋冬が出揃い季節が一巡した。

様々な楽しみ方

五作目は再び春に戻り紅白梅が描かれるが、季節ごとの風情を楽しめるのが季刊誌特有の面白さだろう。作者はそのツボを心得て見る者を飽きさせない。

例えば雪の描写だけを比べてみよう。四作目の《雪景色と福寿草》はボタン雪と思われるほど大きな粒で雪が描かれるのに対して、八作目の《山茶花と雪》では粒は少し小さくなり、葉に積もった雪の表現が面白い。十一作目の《雪とける》はネコヤナギがメダカの泳ぐ小川を背景に描かれ、キラキラと舞い散る雪の表現が星のようで独特である。十五作目の《蝋梅の香り》では遠慮がちに花びらに雪が載り、十九作目に再登場した《山茶花のかおり》に降る雪は、もはや葉に積もることはない。

頻繁に登場する虫や鳥などの生き物に注目するのも楽しいだろう。これは須藤の院展出品作のような大作にも共通する趣向で、大画面になると発見するのも大変だが、本誌の表紙のような小画面では、構図上の重要なポイントになっている。

ふるさとの風と季節

原画はすべて六号というコンパクトなサイズで、今回展覧会を見る機会があれば、印刷された表紙との違いにも注目してほしい。本来印刷は原画通りに再現するものだが、色校正の段階で原画と違っていても、逆に作品としての印象が際立つ場合があるものだ。そんなとき須藤は「かえって勉強になる」と語り、迷わずオーケーを出す。

本誌の表紙原画について須藤は、「植物に助けられている」「あまり自分を出さないようにして、そこから自分の絵が生まれる」と謙虚に語った。

須藤和之が四年前に東京からUターンして前橋に戻ったことは以前にも書いた。赤城山の風に育てられたことが自分の原風景という須藤は、作品にも風を感じさせるものが多い。「魅力的な自然と好きな風を強く感じる距離感にいるからこそ、描ける作品があるはずです」と須藤は帰郷後に抱負を述べた。

本誌の表紙への制作はまだ当分続くものと思われるが、小品だけでなく院展への出品作などが見られる機会も増えて欲しいものだ。

2017年春号「前橋・春の風」6号

2017年夏号「前橋・夏の風」6号

須藤 和之 KAZUYUKI SUTOH

略歴

1981年 群馬県前橋市生まれ／2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業／2007年 東京藝術大学大学院 美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復日本画修了／2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得・博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞／個展(画廊翠巒)(同2010～22)／2011年 中央電機商会カレンダー原画(2011～22)／2013年 アーツ前橋開館記念展「カゼイロノハナ・未来への対話」出品／群馬銀行創立80周年記念 収蔵作品「群馬の四季」制作／2014年 個展(日本橋三越本店)(同2017，20)／2017年 群馬県展 県知事賞／2016年 個展(株式会社ヤマト)／2020年 上毛芸術奨励賞受賞

お客様紹介

社会福祉法人 九十九里ホーム 様

千葉県匝瑳（そうさ）市

社会福祉法人九十九里ホームは、昭和10年10月英国人宣教師A・M・ヘンテ女史によって、結核回復期にある方々の保養所として設立されました。

〝神を信じ人を愛する心〟を運営の基本とし、時代時代の要請に応えて幾度かの転換をし、結核療養所から一般病院へ、更に福祉事業への取り組みを開始し、病院を中核とした医療、保健、福祉の総合施設の完成を目標に業務を推進しています。

現在では、九十九里ホーム病院（149床）と同一敷地内に特別養護老人ホーム（150床）、老人保健施設（80床）、デイサービスセンター、ヘルパーステーション、訪問看護ステーション、また近隣に養護老人ホーム（50床）、特別養護老人ホーム（129床）、障害者支援施設（80床）等の施設を擁し、それら各施設が連携を組みながら地域に開かれた社会福祉法人として、利用者の方々に良心的なサービスを提供しています。建設プロダクトのヤマトは、特別養護老人ホーム「シオン」、サービス付き高齢者向け住宅「聖アンナ館」等の建設工事に携わらせていただきました。

聖アンナ館 外観

聖アンナ館 居室

聖アンナ館 リフレッシュスペース

食堂

サービス付き高齢者向け住宅 聖アンナ館

元気な中高年の移住、生涯活躍をサポートします。

サービス付き高齢者向け住宅とは、建物がバリアフリー構造になっている他、見守り、状況把握と生活相談サービスを行うことが必須となっており、医療・介護とも連携したサービスを提供する高齢者向け住宅です。たとえ要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援の各サービスを一体的に提供します。

住所　九十九里ホーム法人本部
〒289-2147 千葉県匝瑳市飯倉21番地
電話　0479-72-1400
URL　https://www.99-home.com/

ACCESS

JR東京駅から総武本線「特急しおさい号」で飯倉駅まで90分
東京駅八重洲口から高速バスで110分
東関東自動車道成田ICから30分

お客様インタビュー

社会福祉法人九十九里ホーム
理事長 井上 峰夫 様

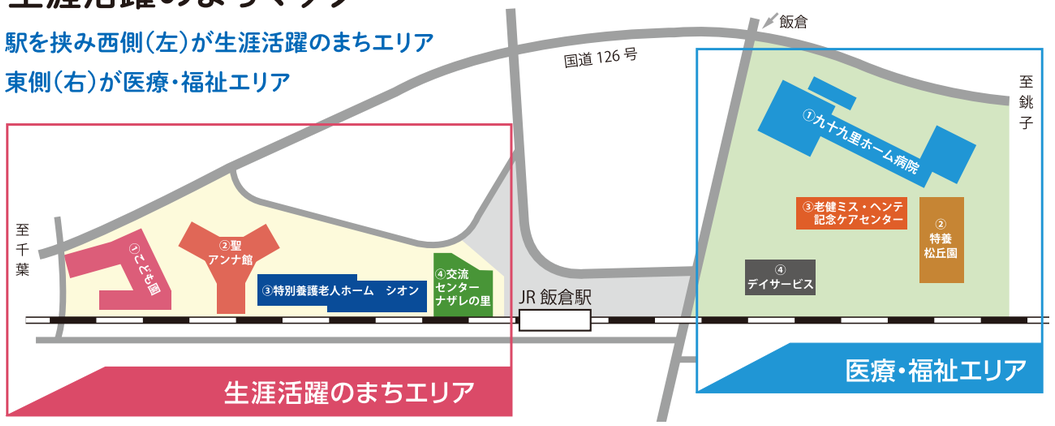
今年2月にオープンしたサービス付き高齢者向け住宅「聖アンナ館」は、私どもの法人としては初めてとなる、元気なお年寄り向けの施設で、予想以上に申し込みがありました。もしも病気になっても、ここなら病院がある、要介護になっても介護老人施設にスムーズに移行できるのではないか、という安心感で支持していただき、私どもの法人の医療や介護の総合力の実績を評価いただいたものと思っています。当施設の設備工事は、㈱ヤマト様に施工していただきまして、入居者の方から評判がよく、大変良かったと思っています。

千葉県匝瑳市は、高齢者が健康なうちから匝瑳市に住み、必要に応じて介護や医療を受け、人生の最後まで充実して過ごせる「生涯活躍のまちづくり」を進めています。当法人は、数年前から匝瑳市と協力して地域再生推進法人の指定を受けて事業を行い、国からも評価されています。

私どもの法人では、九十九里ホーム病院をはじめ、特別養護老人ホームや介護老人保健施設、幼保連携型認定こども園、サービス付き高齢者向け住宅など、多くの施設を運営し、それぞれの施設が連携し、より良い医療・福祉サービスを提供しています。これらの施設を核に、子どもから高齢者まで、多世代が交流して暮らせる「新しい福祉のまちづくり」に取り組んでいます。これからも、生活を支えるための各種事業を展開していく所存です。

生涯活躍のまちマップ

駅を挟み西側（左）が生涯活躍のまちエリア
東側（右）が医療・福祉エリア



頑張れ日本支援プロジェクト

平成23年3月11日に発生した東日本大震災の発生直後より、被災地を支援するため、当法人は地域交流委員会を中心とした支援プロジェクトチームを立ち上げました。原発や津波災害の大きな福島県への専門職派遣や、宮城県への入浴支援の為に職員を派遣するなど、様々な支援を継続して行っています。